

# フレイベルの幼児教育論

— フレイベル百年祭を迎えて —

廣島文理大助教授 莊 司 雅 子

幼児教育の父フリードリヒ・フレイベルが世界の幼児に多くの遺産を残して世を去つて早や百年の歳月が流れた。この間時移り世変り教育は改められた。今フレイベル百年祭を迎えるにあたり、世の幼児教育者と共に靜かに想いを彼の遺産に向けて見たいと思う。百年前にフレイベルが実践した幼児教育の原理や方法は今日から考えて果して如何程の現代的な意義を有つてゐるであらうか。それは全く時代遅れのものであつて、新しい心理学の發達せる現代においては何等取入れる価値がないであらうか。それとも今日いうところの新教育の精神や原理や方法は既に百年前にフレイベルがそれを開拓し、具体的に実践し、世代から世代へと改革され發展されて来たと解釈すべきであらうか。今日のアメリカ教育を支配し

ている碩学デュイイが、現代の教育がその重心を教師から児童へ移動したのは正に教育のユベルニクスの轉回であると言つてゐるが、吾々が叫んでゐる新教育とはこのように重心を児童に移した教育を指すのではないだろうか。即ち旧い教育とは大人中心または教師本位の教育であり、新しい教育とは児童中心または生徒本位の教育であるといふ理解出来る。ところがその児童中心の教育を理論面においても実践面においても徹底的に、而も既に幼児期から行つた人、それこそフレイベルその人であつた。實際フレイベルは有名な彼の標語である「いざや吾等を吾等の児童に生きしめよ！」

(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!)と云う一句が物語つてゐるように、幼児と共に生き抜いた教育史上の

第一人者であつた。

彼が身を教育事業に委ねてから実に四十数年の生涯を専ら子供に捧げ、彼と共に子供を生きしめ、子供と共に彼を生きしめた。恐らく彼程深く子供の姿を見つめ、身を以て子供を認識したものはなかつたであらう。彼は七十二年の生涯を終るまで涙ぐましいまでに子供の姿を見つめ続けた。或る時は母の腕に眠る幼児を見つめ、或る時は嬉々として遊ぶ学園の幼児を見つめ、また或る時は大自然の中に戯れる子供を見つめた。一寸した散歩の時にも仔細に子供の生活を観察し、子供の生活を向上させることを忘れなかつた。そしてこのようにして子供と一心同体になつて生活し、そうすることに依つて初めて子供の本質を發見した。フレーベルの教育研究は子供の研究に終始したと言つても過言ではないであらう。それ程までに彼の教育学的思惟は挙げて子供の本質把握と密接に關係していた。否な寧ろ子供の本質把握から出發して彼の教育学は成立し、たま發展した。周知の如く世の多くの教育者は子供に何時また如何に教授を行うかを學ぼうとして子供を研究する。然るにフレーベルの子供の研究の動機は子供そのものの自己發展を助けるためであつた。然らば斯くしてフレーベルに依つて發見された幼児の本質とは如何なるものであらうか。

## 一、幼児の神性

フレーベルに依れば萬物の中には「永劫の理法」が秘められているから、吾々各自もまた永劫の理法をうちに藏しているものであり、従つて子供のうちにも永劫の理法が宿つている。而もその永劫の理法がやがて神性であるから、フレーベルの見た幼児の本性は神性そのものでなくてはならない。そして保育の仕事は子供の本性たるこの神性を開發することである。然るに神性は無限であるから、神性の開發を目的とする教育は子供において無限を無限ならしめる最も聖なる企圖でなければならぬ。フレーベルに依れば人間は地上に生まれ落ちると同時に、否な未だ生まれ落ちない時、即ち母の胎内に宿つている時から早くも永劫不滅の本質・神の魂・神の精神に従つて人間の形を取つて顯われ出でたる神的なものとして認められなければならない。即ち「神の愛の保証」として、神の親近者として、神の恩寵として、或いは神の贈物として認められ、育くまれなければならない。創世紀にもあるように神は自己の似姿としてまた自己の肖像として人間を創造したのである。従つて人間は既に誕生の刹那から、否な母の胎内にある時から神の神たる所以のもの即ち神性を秘めている。だから幼児の本質は謂わば神から發した一つの火花であ

り、神的なものである。新たに生まれた子供はフレイベルも言うように、恰も親木から落ちて来た成熟せる穀粒のようなものである。それはまた植物の花や樹木の花のようなものである。幼児は恰も人類にとつて一個の若い蕾のようなものであり、一個の新鮮な花のようなものである。一般に植物にせよ、人間にせよ、凡そ發育するものは發育の条件を自己のうちには有つてゐる。言い換えれば完成された全き人間となることは、子供の最初の出現と最初の眼ざしとのうちに決定されてゐる。恰も完成された花、完成された木になることが、既に花や木の最初の現われのうちに秘められてゐると同じようなものである。人間の子はフレイベルに言わせると、その本質のうち既に自然的なもの、人間的なもの並びに神的なものの三つの要素を有つて生まれて來てゐる。而も此等の要素や芽生えの發展をば、人間の子は他の生類と違つて意識的に自ら企図するものである。そしてそれは先ず大人が自然界・人間社会及び神の世界へ子供を連れ込むことに依つてのみ行われるであらう。フレイベルが教育を常に自然と人間と神との關聯において考えたのもこのゆえである。彼に依れば人間は宇宙の一員として絶えずもつと自由に、もつと内面的に、またもつと精神的に、更にもつと心から融合することに依つて、初めて人間としてこの世において成し遂げようと熱望するものが成し遂げられる。そしてまたこのようにして初

めてこの世において獲得しようとする努力してゐるものを獲得することが出来る。勿論人間は自己の欲求するもの、彼の本質の要求するものを追求するには飽くまでも自分の力で行わなければならぬし、またそうすべきであらう。併し吾々は人間としてただ一人でこの世に存在してゐるものではないし、またそうあるべきでもないし、事実一人で存在することは出来ない。吾々は家族・社会・民族・国家更に現在生存してゐる全人類種族の一員であるといふことを子供といへども予感し、やがてそれを認識するものであらう。一人の子供といへども總てのものと共にそれ自身一つの全体であり、更には全体を形成するものである。宇宙のすべてのものは吾々と共に一つの全体を形成してゐるが、それ自身としては更に一つの全体である。このように人間は全体の一部分であると同時に、それ自身一個の全体である。というのは人間は一方においては宇宙の一部であるが、他方においては一個の全体である。人間ばかりではなくて、宇宙の各部分は何等かの意味において全体を含んでおり、全体を反映し、全体を表現する一個の有機的全体である。例えば菊の枝を地中に挿しこんで置くと、そこから新しい植物全体が成長するが、これはその植物の全体が枝の中に含まれてゐるからである。植物において既にこのようであるから、況して神の肖像としての人間の子は尙お更のことである。というのはフレイベルに言わせる

と、人の子は人類の全体を包含しているばかりではなくて、創造主の本質——即ち生き生きとした創造的な本質、生命に満ち生命を生み出す本質、だからまたそれ自身統一している本質を自己のうちに有つているといふのである。吾々は先にフレーベルは幼児の本性を神性として発見したと言つた。併し神性とは普通人々が考へるような完全無欠なもの、絶対的なもの、だからまた外から何等作用を加へる必要のないもの、ひとりでに神の如くになれるもの、従つてそこには發展も進歩もないといふような意味のものではない。言葉を換へて言うなら崇高偉大な全智全能であるとする宗教的な意味に考へられてゐるような神性ではなくて、それはどこまでも右に述べたような創造的本質としての神性、即ち絶えずこの天地を創造してやまない實在、生命に満ち生命を生み出すところの實在としての神性を意味するものでなければならぬ。フレーベルの意味する神性をこのようなものとして解釈して、初めて彼の説き教へてゐる幼児の全本質を理解することが出来るであらう。

既に幼児を被造物として、神の似姿として、従つてその本性を神性として考察する以上、吾々は幼児をその誕生の刹那から全生涯を通じて一個の創造的な實在として考察し、取扱ひ、そして教育しなければならぬ。フレーベルに従へば神は創造的な實在であり、神の各々の思想は一つの仕事であ

り、行爲であり、生産である。神は永劫なる行いを通じ、また絶え間なき創造を通じ、更には永劫なる實在からこの地上の見得る時間的な諸現象の中に、自らを表わし、それに依つて神は自らを吾々に知らせ、神の本質を吾々に啓示し顯現してゐる。同様に神の似姿として神に依つて造られた人間も、フレーベルの解釈に従うと、既に幼児の時から自らの本質若しくは自らの生命を自らの生活に表わしてゐる。そしてこれは正に神の場合と同じように自己の活動や自己の行爲に依るのである。試みに幾分發達せる幼児の感官の働きを見ても人々はこの間の消息を知ることが出来るであらう。吾々は幼児の感官の働きを屢々単に外からの刺戟に依つて起つて来るものと解釈するが、併しそれは決して單なる外からの刺戟だけに依るものではなくて、実に内なる魂の作用に依つて起つて来るものである。このようにフレーベルは幼児の總ての生命現象や生命活動、その他感官や四肢や身体の活動はすべて幼児が自己の本質を生命の法則に従つて自由に發展させたいといふ衝動の現われであると見てゐる。従つて彼は幼児の生命の諸々の現象を常に最も内的なものと理解し、そしてそれを育むことに努力してゐる。子供といふものは既に夙くから次のことを予感しているとフレーベルは言つてゐる。両親や大人は自己のためにただ単に外部的な生命の要求を或いは衣食住に依り或いは遊戯作業等の手段に依つて満たしてくるば

かりでなく、更に自分達の諸力や諸能力を伸ばしたり、内的生命を育くんだり心情や精神の要求を満たしてくれたりするよう千々に心を砕いてくれるものである。そしてこの最も内的なもの即ち自己の本質を保育することが両親や大人の唯一の目標であり究極の目的である。それ故若し子供の内面世界の保育において、両親や大人に依つて生き生きとした感情が子供の魂を満たすならば、その時子供はそれに依つてより高き生命統一の一部として自己を感じまた自己を見出すであろう。そうすれば両親に対する真実の愛と感謝、大人に対する尊敬と感戴とが更に子供の心情に芽生えて来る。子供というものは自己の生命を何よりも先ず一個の内的なもの、最も内的なものとして、また一個の統一せるもの、独立的なものとして知覚するものである。これは心ある母親や保育者であれば容易に証明出来るであろう。また如何に夙くから子供は彼の人間的の生命の微かな表現と共に、外的に身体的に与えられたものから内的に精神的に与えられたものを区別しようとしているかに人々は驚くであろう。或いは寧ろ与える人の心情を感じ、与える人の精神を知覚しようとしているかに驚くであろう。このように考えて単なる外面的な肉体に対する愛は謂わば子供の外的理解のためであり、それは単なる子供の身体的保育だけである。併し子供は自己の本性が高尙になればなる程、また自己自身を精神的に感ずれば

感ずる程、身体的に与えられるものには余り自己を結びつけないものである。

以上のように考えて、幼児の諸々の精神的な方向や關係は既に無意識的なそして無器用にさえ見える幼児のうちに秘められていくということがわかるであろう。若しそれが既に幼児のうちに宿つていないなら、それが幼児から發展して来る筈はない。若しまたそれが幼児のうちに宿つていなかったら、如何に聰明な母の精神でも子供の誕生の瞬間から子供の存在を理解し知覚するところの存在として、またそうすることの出来る存在として、子供を完全に取扱うことは出来ないであろう。一般に何か或る物への素質と萌芽とのないところには、この何か或る物も決して生まれることが出来ないし、また現われることも出来ないであろう。併し真にそれが幼児のうちにあることを信ずるならば、まず幼児に対して真に深い愛を有つていなければならぬし、また幼児の地位を自己の同じ水準に置くことが必要であろう。語を換えて言うならば、真に幼児に生き得る人間にして初めて幼児の眞の姿を把握することが出来る、幼児の一挙手一投足にも深い意味を見て行くことが出来るであろう。また斯かる人にして初めて幼児の行動や活動の有つ創造的な意味を解して、これを育くむことが出来るであろう。

## 二、幼兒の感受性

幼兒期の子供の感受性の強いことはフレーベルが既に『人間教育』の至るところに強調している。彼は更に幼兒期の特徴であつて、而も幼兒教育の重要な基礎附けとして大事な事柄を挙げて言つている。それに依るとこの世に出たばかりの人間はちのみ子と呼ばれる。そしてこのちのみ子という言葉が十分その意味を示しているように、呑み込むことが実にこの時期の子供の殆んど唯一の活動である。というのは人間はこの時期においてはただ多種多様なものを外から取り上げ、そして自己の中に取り込む。即ち呑み込んだり見込んだりすることがこの時期の子供の本質である。これをフレーベルは「恰も物を専有しようとする一つの大きな眼のようなものである」と形容している。幼兒期が人間發展の現在及び未来にとつて重要な意味を有つのはこのゆえである。詳しく言うなら幼兒期において何等病的なもの、卑俗なもの、凡俗なもの、曖昧なもの、悪性なものを呑み込まない見込まないということとは、人間の現在及び未来の生活にとつて極めて大切なことである。だから周囲の者の眼差しや容貌は純潔で、不動で、確實で、信頼を呼び起し、信頼を養わなくてはならない。清澄な空氣、明るい光線、清潔な部屋は他のものが如何に貧弱

であつても常に望ましいものである。何故かといえれば前に述べたように、幼兒の全存在は恰も大きな眼のように、外部の印象に向つて開放されているから。而も幼兒期に呑み込んだもの、即ち若き日の印象は悲しいかな生涯を通じて殆んど取消すことが出来ない。吾々が自己自身を相手とする最も悲惨な戦は言うまでもなく、後年の最も不幸なそして最も悲痛な運命さえ、多くはこの時期の發達段階にその源を有つているとフレーベルは叫んでいる。幼兒期の教育の重要な所以もここから明らかである。

このことは最近の進歩した心理学によつて明らかにされているではないか。ドイツの形態心理学者コフカもその著の中で幼兒期において如何に多くのものが学習されるかを論証している。彼はこの期における精神及び身体の發達が驚くべきものであることを示している。彼は更に比較心理学の立場から幼兒期が学習の時期であることも強調している。このように考えてフレーベルが「幼兒の全存在はまるで一つの大きな眼のように外部の印象に向つて解放されている」と言つている意味もわかると思う。アメリカの心理学者マーレイも『現代心理学の開拓者としてのフレーベル』という彼の著作が語つているように、フレーベルの幼兒教育思想には既に今日の心理学の研究の結果が含まれていることを吾々に語つている。ただフレーベルは当時にあつて此等の原理を科学的に

若しくは実証的に扱う代りに、当時の時代思想の影響に依つて、自ら体験したものが乃至幼児について親しく彼の觀察した事実を、思弁的に哲學的に表現したのであると解して差しつかえないと思う。

以上の考察から結局フレーベルは幼児教育上特に精神的な働き即ち彼のいう神性の教化乃至發達に重きをおいていることがわかる。勿論幼児期における諸々の精神現象は未だ固定した方向を有つたものではない。例えば幼児の描画の練習も決して將來の画家を目指すものではなく、また音楽の練習も決して音楽家たることを目当てとするものではなくて、其等は單に幼児の本性の各方面への發達を志向するに過ぎない。而もそれは幼児の精神にとつて必要な食物であり、謂わば一種のエーテルのようなものである。換言すれば人間の精神は力と強さとを得んが爲に、このエーテルを呼吸してその中に生活してゐるのである。而も神が人間に与え給える種々なる精神的素質は必然に種々なる方向に多様な姿として現われる。だから吾々は成長しつゝある幼児の心の裡にあるこのよくな多面的な精神的傾向を徒らに抑えたり、壓迫したりすればその爲に幼児の本性は甚だしく毀損される。恐らく其等の諸傾向を切断して他の諸傾向を植え付け、若しくは接木することに依つて、將來の地上の幸福や心の平和や天上の祝福を幼児に招來し得ると考えるが如きは、幼児の本性を傷つけ

ること甚だしいと言わなくてはならない。人のよく知るように神は接木も挿芽もし給うものではない。だから人間も亦神の如く決して接木や挿芽をしてはならない。神は永劫の理法に従つて最も微細なもの、最も不完全なものをも次第に發展させ給う。フレーベルは自然における神の働きを人間は學ばなければならぬと叫んでいる。而も神性こそは吾々の思想に對しても行動に對しても最高の目標でなければならぬ。だから世の両親や教師はその子や生徒に對して神が人間に對すると同じようにしなくてはならない。而もこのように眞に人間として教育された幼児は、纏て社会生活上のあらゆる要求や必要にも十分応じ得るといふことを人々は知らなければならぬ。ところがそれは逆に幼児期の教育が忽がせにされ等閑に附された子供は、その生涯を通じて自己の健全な精神發達をはかることが出来ず、従つて社会の要求にも必要にも十分応じることが出来ない。既に述べたように人間の全生涯を通じて痛み続け、永久に癒やすことの出来ない傷がひと度吾々の心に固着したら、それは最早や決して癒やすことが出来ない。また吾々の心の裡の高尙な感じや思想がひと度吾々の精神から消え去ると、精神のうちに忽ち暗い場所が生じて、どうしても明るくすることが出来ない。此等のことを世の人々、特に世の親達は心に留めて置かなければならぬ。人々は若い時代特に幼年時代に指導を誤られた爲に受

けた一切の傷を蔽い隠すことは出来ない。幼年時代に抑圧され、萎縮され、また全く枯らされた高尚な萌芽をば、人々は己が心のうちに見ようとはしないのであろうか。吾々は或いは重要な地位を社会に占めることであらうし、また大規模の職業を営むことであらう。また利益ある事業に従事することもあろうし、高尚な上品な社会的教養を楽しむこともある。併し如何にこのような恵まれた境遇にあつても、吾々が独り靜かに自己を眺めた瞬間に、吾々の心眼に映ずる自己の内面的教養の欠陥や分裂を吾々は如何ともすることが出来ないであらう。幼年時代の教育の不完全乃至未完成から来る此等の欠陥を吾々の地位や職業が取消し得るであらうか。このように考へて若し吾が子を有爲な人間にしようと思ふならば、たとえ吾が子が少年期に達していても幼児期に修得しておくべき筈のものを学んでいない場合には、吾々は是非とも子供を幼児期に立ち戻らせなければならぬとフレーベルは言うのである。斯くして彼等が尙も爲すことの出来るものは怠らずつとめさせ、まだ取返しのおつくものは取返させるようにしなければならぬ。このようにすれば子供達はたとえ一年二年遅れても必ず目的地に達するであらう。言ひまでもなく彼等が誤つた目的地点に達するよりは、一年二年遅れても眞に正しい目的点に達する方が賢明である。一般に人々は自己の爲にも子供の爲にも幼児期から非常に多くを學び得るにも拘

らず、自己の幼年時代を反省し吟味することを輕視してゐるではないだらうか。そこでフレーベルは人々に次の如くに叫びかけている。「汝等自らの幼児期へ立戻つて、よく注意して見よ。そして汝等の心情における永遠の幼児期を呼び覺まし、これを温め生かすようにせよ。而もこうした要求は「爾曹嬰兒の如くなれ」というイエスの言葉の意味するところのものであるだらう。

### 三 幼兒の教育

以上の如く考へて若し吾々が幼年時代に精神的に要求されるものを満足させることがなかつたら、吾々は吾々の生涯中最も幸福なまた最も祝福されるべき時代に、希望に満ちた吾々の心が懐くものを得られないということになる。吾々が特に幼児の教育に意を用いなければならぬわけもここに在る。前にも述べたように如何に幼児でも自己の精神的自我若しくは自己の本質を十分予感している。彼等は幼児ながらに自己を一個の精神的全体と感ずることが出来る。彼等の心の裡には物を一個の全体として、而もその統一並びにその多様において受け容れる能力が目覺めている。彼の心の裡にはまた一個の全体を外部に表現し、自己の存在をばその本質の統一と多様との二方面において外界に表現する能力も芽生えて



いる。このように吾々は幼児も亦既に最高の仕事をなすものであるということ、人間の本分乃至天職を充たすに足るものであるということ、換言すれば人間の本性乃至神的本性を自己のうちに実現するに足るものであるということ認めなければならぬ。だからこの能力を熟練させ、向上させ、また自覚させて、思慮あるものにしなければならぬ。斯く考えてフレーベルにとつては教育の仕事とは要するに「自覚に進み、思惟し、認識する本質としての斯かる幼児を、意識的にまた自己決定的に内的理性即ち神を完全に実現するように勵まし、取扱ひ且つ斯かる境地に進む道と手段とを指し示すことである。」詳しく言えば幼児の裡なる神性即ち幼児の本質は教育に依つて發展され実現されなければならない。斯くすれば幼児は自由に意識的に神性に従つて生活し、神性を實現するようになる。而もまたこの教育に依つて幼児は自己自身乃至自己自身の内部を明瞭に理解し、進んで自然と融合し、神とも合一するようになる。こうした境地に幼児を導く方法としてフレーベルは何よりも先ず幼児の自己活動を重んじた。彼は教育上決して命令的な干渉的な方法は取らなかつた。この方法も彼は自然から学んだのである。彼は「人間教育」の中で言つてゐる。「若き謂わば育てられつつある人の子はまだ自覚こそしないが、自然の生産物のように飽くまでも最善

なるものを自己自身の爲に求めるといふことを人々は予想すべきである。而もその最善なものを求めるのに飽くまでも幼児は彼に適した形式を以てする。」この点について「人間教育」の中には更にこう述べてある。「人々はこの子鴨が教えられず池に急ぎ、水中に飛び込み、雛はひとりて土を掻きつつ餌を求め、子燕は飛びつつ巧みに餌を捕えるのを見るであらう。更に吾々が若き植物や動物に空間と時間とを与えるのも、斯くして初めて彼等が美しく發展し、立派に成長することを知るからである。また彼等に休息を与え強制的な干渉的な動作を取除こうと力めるのも、斯くしなければ彼等の純真な發展と健全な成長とが妨げられることを知つてゐるからである。ところが若き人の子だけは大人にとつて欲するままに鑄型に入れ得る蠟の一片乃至粘土の一塊のようなものである。フレーベルに言わせると世の親も教師も花園や田畑や牧場や森を逍遙しながら、自然が沈黙の中に教ゆるものを聴こうとしないのである。そこででは障碍と圧迫との中に生い立つ雑草と呼ばれるものでさえ立派に内的合法性を示していないものはない。また自由の空間に、田畑に、はたまた花壇に生える植物を眺めても、如何にそれらはよく合法性を表わしているかを知ることが出来る。其等は恰も姿美しき太陽と輝かしき星とを大地の中から發展してゐるようなものである。さ

れば夙くから本性に反して形式や仕事を強いられ、その爲に虚弱な不自然な姿をして世の親達と一緒にぶらつくような子供は決して立派に成長し、円満に發展することは出来ないであらう。

このように見て来て教育は何よりも先ず子供の内的なもの即ち内的な神性に基礎を置かなくてはならない。ただすべて内的なものは外部に現われたものの中に、また外部に表わしたものを通してのみ認識される。けれども教育は単に外部に現われたものから直ちに内的なものを推断してはならない。吾々は寧ろその逆を推断する方が正しい。ところが世にはこうした真理を適用しないばかりか、却つてこれを裏切る者さえ少なくない。というのは幼児の生活において単に或る外部的の現象から直接その内的なものを推断する爲に、相反目し、相争う出来事や誤解が生じて来る。幼児や少年に対する絶えざる幾多の失敗や親子相互の間の誤解、その他幾多の無用の不平や不当の叱責、幼児に対する愚かな要求等は何れも原因はここにある。だから世の両親乃至教育者はこの真理の適用を如何なる微細の点までも熟慮するように力めなければならぬ。斯くして初めて親子の間の若しくは生徒と教師との間の信頼乃至融合が得られる。實際外観上善く見える子供も

その実自発的にまた愛情と尊敬と自発性とを以て積極的に善いことを行おうとはしないで、却つて表面上無作法な傲慢な執拗な、だから善くは見えないような幼年や少年の方が、屢々善いことに対して自発的な活潑な熱心なそして力強い努力をするものである。また外面上心の傲慢な子供がその実如何なる外部にも心を奪われない一貫せる確かな思想を懐いている。斯く考えて教育は飽くまでも幼児の生命の本質を洞察して、そこに基礎を置かなくてはならない。

以上私は主としてフレーベルの著作から彼の幼児教育論の基礎とも見るべき原理を抜き出して概観した。このような基礎的原理に基づく幼児教育の實際をフレーベルは如何に考えたであらうか。私は機会を得てこの問題を論じて見たい。

(一九五一年四月十五日)